



「千秋楽」という言葉の響きが好きです。語源については諸説ありますが、元々は雅楽の最後に演奏される曲名だったとか。

「秋」は「終」と同じ読みですね。私はこの言葉を目にするたび、「人生には1000通りの終わりがあるが、どの終わりの終わりがあれ！」というイメージがなぜか浮かびます。

10月8日に亡くなった第54代横綱輪島こと、輪島博さんの葬儀が15日に行われました。享年70。葬儀には大勢の著名人が駆けつけ、故人の人脉の広さが伺えました。デーモン閣下が「千秋楽」というオリジナル曲をアカペラで歌い、出棺時には通算勝ち星の数と同じ673個の金色の風船が空に舞いました。金色は輪島さんが好んだまわしの

76 第54代横綱 輪島

長尾和宏（ながお・かずひろ）医学博士。東大第2期卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る総合診療を目指す。」近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」は、いずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

色でした。なんだか楽しげなお見送りでした。

輪島さんに下咽（いん）頭が見つかかったのは、2013年秋のこと。すぐに切除手術を受け成功しましたが、声帯を失いました。

咽頭は鼻の奥から食道までの通り道となる部分です。上咽頭、中咽頭、下咽頭に分かれま



明るさ失わず、見事な人生の千秋楽

につながるどころです。下咽頭がんは、初期の頃は症状が出ないことが多く、発見時には6割以上の人が進行した状態という、やっかいながんです。また、3割近くの人に食道がんとの重複を認めます。

食べ物を飲み込む時に異物感がある、しみる、耳の周囲が痛む、声がかすれるなどの自覚症状があれば必ず受診してください。進行した下咽頭がんで手術可能な場合、多くは咽頭全摘手術となり、声帯を失うこととなります。命と引き換えに声を失うことがどれほど辛いかは、経験した人でないとわからないでしょう。

しかし、輪島さんは声を失っても、持ち前の明るさを失うことはありませんでした。かつて不祥事で相撲協会を去り、プロレスラー

に転身したにもかかわらず、多くの後輩力士から慕われて、筆談で気さくにアドバイスをするなど親身に相談にに応じていたようです。

手術後も毎日のウォーキングをかかさず、この夏頃までは、ひとりで地元の商店街に出かけ、食事をすることもあったといます。

死因は下咽頭がんと肺がんによる衰弱という報道ですが、自宅のソファでテレビを見ながら、座ったまま眠るように逝ったとのこと。「最期は誰にも迷惑をかけず、とてもいい顔でした」と奥様の談。

咽頭がんや肺がんの患者さんから、「このがんの最期は管だらけになって苦しいのでしょうか？」との質問を受けることが多いのですが、痛みのない平穏死が十分可能であることを、輪島さんが身をもって証明してくれました。

波瀾（はらん）万丈な人生を歩んだ名横綱の、見事な千秋楽でした。